

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 不定期連載〈4〉川の思い出
- アマゾン見聞記(つてとこかな)
- 天然アユ調査会 県外研修
- 平戸橋周辺の自然観察(6)
- 今月の一枚
- 研究所の調査風景
- これは何の枯れ枝ですか？

10
2001 October
No.42

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/> yahagi/index.html e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

不定期連載〈4〉

川の思い出

～ 木津川 ～

内田朝子



左の歌は小倉百人一首にある歌で、現代和訳は、「みかの原を二つに分けて湧き出て流れる泉川よ。あなたを『いつみ』たというのか。ほくはまだあなたに逢っていない。それなのになぜこんなに恋しいのか」といったところで、一度も会ったことのない女性に対する恋心を詠み上げた歌

だそうだ。田辺聖子おばちゃんの解説によると「王朝には『逢わざる恋』という恋愛のテーマがあって、知り合って恋におちるというのではなく、まだ見ぬ深窓の麗人にあこがれを捧げた。」とある。約1200年前の貴族の感性は現代人の私にはなんとも不可解だ。

前置きが長くなったが、私はこの「みかの原」というところで生まれ育った。みかの原は瓶原と書く。瓶原は山城国(京都府)加茂町、奈良のむかし、聖武天皇が一時、京(741-744年)を営んだところでもある。いづみ(泉)川は三重県から流れ出て、奈良県と京都府の間を流れている現在の木津川。この歌を鑑賞すると、恋心をイメージさせるような清冽な川が流れ、さぞ美しいところなんだろうと思われがちだが、ただの田舎である。

私の実家は木津川の堤防から200mほど離れた場所にある。物心がつく頃、わが家では牛を売って耕耘機を購入することになった。私が「モウモウさんはど

こ？」と聞くと、^{おおかわ}大川で流されてしまったと祖母に教えられた。地元では集落内を流れる水路に対して木津川は「おおかわ」と言われていた。

小さい頃は堤防や河川敷でよく遊んだ。初春、堤防の土手でツクシ取りをするのが女の子の定番の遊びであった。少し大きくなって小学校に入ると、近所のお兄ちゃん、お姉ちゃん達と一緒に隠れ家作りというのもやった。お兄ちゃん達が竹をナイフで刈り取り、出来た空間に段ボールを張って子ども達の家が完成した。「危ない所へ行ったらあかん」と言う大人達への後ろめたさも手伝って、子ども心はとてむわくわくしていたのを覚えている。七夕になると河川敷から竹を切り出してもらい飾りをいっぱい付け、子ども達の手で木津川に流した。今思うと河川環境に悪いことだが、当時は誰もとがめなかった。

河原や堤防で遊んだのも小学校低学年までで、小学校にプールが設置されてからは、川は危険だ近寄るな教育が徹底した。上流にダムができたのもその頃で放水による増水の危険も教えられた。そして、子ども達が川へ近づく機会も徐々に減っていった。



木津川筋六カ浜とその他の浜
「加茂町史 第2巻 近世論」(1990)より転載
木津川舟運が盛んだった頃(1700年頃)、瓶原にも浜があった。

堤防からみる木津川の風景は、私が小さかった昭和40年代と比べてもほとんど変化していない。今年もお盆に里帰りした時、河川敷のクヌギを見回ってクワガタとカブトムシ捕りをした。父が娘である私達姉妹にしたように、私も娘達のために虫捕りをしている。みかの原を流れる木津川には世代が変わっても変わらな



今、僕は願いがかないブラジルで暮らしています。「ブラジルに来たかった」という、ただそれだけの理由が僕をブラジルに導いてくれました。豊田市北部の保見団地を取材する中で、イメージしていた「ブラジル」が先入観だけのものであることに気が付き始めました。自分の無知を恥ずかしく思うと共に、ブラジルに行きたいという思いが膨らんでいきました。日本の約23倍の面積をもち、多様な文化が混在するブラジルを、自分で体験してみたかったのです。

7月下旬、休みを利用してアマゾンへ旅立ちました。アマゾンと聞けば、少し奥地に入るだけでワニ、ピラニア、大蛇なんかがたくさんいるところを想像するでしょう。

ところが、アマゾンは僕の想像を見事に裏切ってくれました。まず僕が訪れたアマゾン河口の街、ベレンの中心街はビルが林立する都会で、日本の夏を思わせるような湿気だけがアマゾン気分にはさせてくれました。

そうは言っても、アマゾン河を間近で見ると自然に高揚してきます。ツアーガイドから「アマゾン河は100を超える川が集まっており、河口の川幅は240km」という説明を受け、ただただあ然とするばかりでした。

中流域の町にすむ日系人の話によると、アマゾン河の水位は雨季と乾季で5m前後変わるそうです。乾季になると、

住民達は干上がった土地を利用し穀物などを育てます。山で放牧していた牛をアマゾン河の近くへ移動させるのも、この時期だそうです。住民達は、乾季に出来る肥沃な土地をうまく利用しているとい



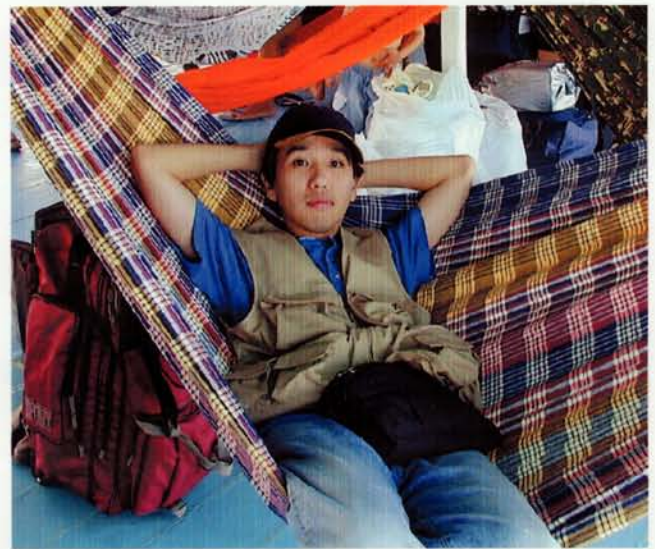
い自然がある。

現在、矢作川研究所で古鼠プロジェクトに参加しているのは、私が木津川のほとりで生まれ育った人間であり何か引き合うものがあったからなのだろうか？と、ふと思うことがある。

(うちだ あさこ、豊田市矢作川研究所 研究員)

うことです。季節を問わずアマゾン河は交通手段であり、魚を供給してくれる場所でもあります。常に住民はアマゾン河と密接なかかわりを持ち続けているのです。

ベレン市街を後にし、次に目指したのは中流域の町、サンタレンとモンチ・アレグレです。サンタレンからモンチ・アレグレへの交通手段は船のみです。それも一日一回出航するだけです。乗客は船の中にハンモックをつるし、5時間の船旅を過ごすのです。初体験のハンモックはとても気持ちよく、昼寝にはもってこいという感じです。



船上でくつろぐ筆者

アマゾン旅行は一ヶ所で3日以上滞りが理想と言われています。交通手段が限られているだけでなく、昼間の暑さの中で動くと体調を崩すからです。アマゾンで暮らす人は必ずと言っていいほど昼寝を欠かしません。これもアマゾンで暮らすための生活の知恵なのでしょうね。

アマゾン河のような緩やかな時の流れを実感できたアマゾン旅行でした。

(ふじわら ひさみち、日系社会青年ボランティア)

ホームページ「ブラブラ滞在記」も見てね！

<http://brasilia.hoops.ne.jp/>

● 天然アユ調査会 県外研修 ●

山本敏哉

毎年恒例の天然アユ調査会の県外研修が、今年も8月9日から2泊3日で実施されました。今回の目的地は兵庫県立「人と自然の博物館」と、兵庫県の西部を流れ、瀬戸内海に注ぐ揖保川です。揖保川は、地元で改良を重ねた人工産アユ（海産と湖産アユの交配品種）の種苗生産が成功して、毎年数多くの友釣りファンが訪れることで知られています。

初日の揖保川漁協での研修では、組合長をはじめ組合員の方から、20年以上にわたる地場産のアユの生産の取り組みについて、その経緯や苦労話をうかがいま

揖保川漁協で説明を受ける（8月9日）



した。20年前には、放流用としてはまだ湖産アユの全盛期でしたが、既にその頃より湖産だけに依存することの危険性を感じて、揖保川産独自の種苗の開発を始められたそうです。開始して最初の10年ぐらひは暗中模索で失敗も続き、挫折しそうにもなりましたが、その後の粘り強い努力が実って、品種改良および飼育法の確立に成功しました。現在では完全に軌道に乗って、元気なアユを安定して供給できているそうです。困難を克服した背景があつてのことでしょうが、組合員の方の自信にうち満ちた話しぶりが印象的でした。

翌日は、川でアユの観察と釣獲調査を行いました。実際に川に入って、我々調査員はまず、アユの数の多さとサイズの大きさに驚きました。釣れてくるアユは軒並み20cmを越えていて、最大の個体は26cmにも達していたぐらいです。水の透明感も高く、アユをこれだけの量はぐくめる環境が川にあるのでしょうか。矢作川もいつか、地場産のアユが色濃く棲む川になるのを願いたいものです。

（やまもと としや、豊田市矢作川研究所 研究員）

平戸橋周辺の自然観察(6)

山原勇雄

9月4日の火曜日、おなじみの平戸橋下流右岸の岩場に行って来ました。

先日の11号台風以降、矢作川の水は汚濁した流れとなり、三河湾に注ぎ続けています。幾多の歳月に形を変えることのない巨岩が、立派なたたずまいで川を見守っているかのようでした。



岩場周辺の砂地に生える植物に目をこらすと、平地で見られるものがけっこう生育しています。たとえばツユクサ、マツヨイグサ、センダングサなどが



オオオナモミ
そうで、初秋の太陽を浴びて輝いていました。なかでも秋が来たんだな～と思わせるものに、オオオナモミがあります。草本ですが、1m以上になると木本かと思えるくらい立派です。秋が深まる頃、つば状の実にトゲが無数にあり衣服に簡単にくっつく、例の実をつける植物です。幼少の頃、誰もが友人とこの実を投げて遊んだことでしょう。

また水辺の近くにはイヌタデ、ガマを確認しました。淡いピンクの穂が出始め、早いものは咲いているものもあるツルボを見たり、ヨウシュヤマゴボウの茎が鮮やかな赤紫に染まっているのを見ると、秋を感じます。ミソハギ、メドハギも花を見ることができました。そして川面をのぞき込むように穂をたらしめているケイヌビエは、イネ科を代表する風格でカメラに笑みを向けてくれるかのようでした。

（やまはら いさお、平戸橋自然観察『草だらけの会』）

ケイヌビエ（筆者 撮影）

今月の一枚



「僕たちは聞きアユ会に出場するため、きれいに、おいしく焼かれているところです。」

(二〇〇一年八月三十一日)

横井恭夫氏 撮影)

研究所の調査風景

て6河川、矢作川豊田市ブロックとして6地点の2ブロックに分けて、約20人の回答者によって行われました。評価はアユの香り、肉のうまみ、容姿などの5項目について採点を行い、その合計点で競われました。結果は以下の通りです。



8月31日(金)

恒例となりました聞きアユ会が古崩水辺公園で開催されました。今年は多くの釣師の方々にご協力頂き、全国4河川および矢作川水系7地点の計11カ所からアユが集まりました。この場をお借りして釣師の皆さん、そしてアユを焼いて下さった焼師の皆さんに厚く御礼申し上げます。

聞きアユ調査は全国ブロックとし

全国ブロック

- | | | |
|----|-----------------|------|
| 1位 | 寒稜川 (豊川水系、愛知県) | 303点 |
| 2位 | 段戸川 (矢作川水系、愛知県) | 295点 |
| 3位 | 揖保川 (兵庫県) | 278点 |
| 4位 | 川辺川 (球磨川水系、熊本県) | 276点 |
| 5位 | 長良川 (岐阜県) | 265点 |
| 6位 | 矢作川 (愛知県豊田市) | 262点 |

矢作川豊田市ブロック

- | | | |
|----|-------|-----------|
| 1位 | 豊田大橋 | 297点 |
| 2位 | 古崩 | 288点 |
| 2位 | お釣土場 | 288点 |
| 4位 | 平成記念橋 | 264点 |
| 5位 | 広瀬 | 255点 |
| 6位 | 葵大橋 | 223点 (白金) |



これは何の枯れ枝ですか？

トビモンオオエダシャクが見事に梅の枯れ枝に変身している擬態。色も形もそっくり。頭部の二つの角が本種の特徴。

(2001. 6. 11 西広瀬町地内 梅村尊二氏 撮影)

編集後記

今回のRioには、さまざまな川の印象や思い出の記事が集まりました。いかがでしたでしょうか？

あの東海豪雨から1年が経過しました。上流域では今もなお改修工事が続いています。8月10日に、岐阜県上矢作町で行われた「第2回 矢作川の環境を考える懇談会」(国交省中部地方整備局主催)に参加してきました(http://www.cbr.mlit.go.jp/toyohashi/kondan/f_11.html)。流域の自然環境の保全、街づくり計画との連携の試みはまだ端緒についたばかりですが、研究所でも有益なデータを提供していければと思っています。(洲崎)

ご意見・ご感想をお寄せください